
牢獄の逢い

シェリー酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牢獄の出逢い

【Nコード】

N9158Z

【作者名】

シェリー酒

【あらすじ】

異世界トリップもの。美形人外×選ばれなかった平凡少女が出逢いのお話。

一話

静寂。

風のない暗闇の中からくるりと身を翻すと、来訪者は慣れたように日和ひよりにべったりとくつついた。

青白い金属のような光沢がある髪は長く、頬は高級なアンティークドールそのものの透明感を持ち、髪と同色の長い睫が青水晶の瞳をぐるりと囲む。

大柄ですらりとした瘦身はふんだんに銀の装飾をまとわせた白い外套を着こんでおり、身動きするたびちらりと見える尖った耳には二匹の蛇が絡みつく銀細工が優雅だ。

悪魔的な美貌で彼が微笑んで首筋に口づけ、無邪気な仔猫のようにごろごろと懐いてくる心地よさに日和は流されそうになりながらも、いつものように力なく引き離れた。

「触っちゃだめだよ」

日和は掠れる声で呟くと、辛そうにごほごほと咳きこんだ。

この地下牢に囚われて以降、看守の気が向いた時にしか薬や食料が与えられず、まともな食事を摂れていないため、いつの間にかすっかり痩せてしまっている。罪びとの着るような薄い衣　以前いた世界の病院でよく見かけた入院服に似ている　からは腕や足が剥き出しになっており痛々しい。また青黒い痣のようなものが皮膚の内側からいくつも浮かび上がり、痣そのものが生きているかのよう
に時々ビクリと脈打つのが何とも不気味だ。

「病気が感染うつっちゃうから、もう来ないでって言ったのに」

日和はそう言い、宝石のように光る彼の瞳から目を背けると、また

じつとじつとずくまっ
た。

一話

日和が原因不明の病を発症し、この地下牢に隔離という名の幽閉をされる身となつてから、彼 青蛇 ブルウ・サーペント という種らしいゲブがいつからかやつて来るようになった。

ゲブは人間なんかほんの人睨みで殺してしまえるほど高位の魔物らしいが、そんな素振りを一つも見せず、毎夜当たり前のように現れ、甘く微笑み、日和にくつついてくるだけで後は時々世間話をする程度。

もちろん日和だってそれなりに見知らぬ不審者に対する警戒心は持っていた。そう、彼の出現に初めはものすごく驚き、怯えたのだ。鉄格子を開けて入ってくるならともかく、いきなり同じ牢の中にぽんと現れたのだから、当然恐慌状態になり思わず泣き叫んでしまつたくらいだ。

しかしゲブは平然と日和のパニックが収まるまでごろんと寝転がり、じいっと見つめてくるだけで、その時はほんの数分経つとまた現れた時と同じくぽんといなくなつた。そんなことが何度も続けば自然に恐怖心も薄れるというもの。

ゲブは十話しかけたところでようやく一返すかどうかといった極端に無口な男（名前を知るのに一週間はかかったのだ）だが、誰も見舞いなどに訪れてくれることのない寂しい牢獄では、ろくに喋らずともこうして傍にいてくれるだけで心強い。

この薄暗い世界の中で、日和にとってゲブだけが救いだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9158z/>

牢獄の出逢い

2011年12月29日14時49分発行